

平成30年12月7日に第33回福島県特別支援教育センター研究発表会を実施しました。200名を超える多数の参加がありました。午前は、当センターの研究発表、午後には明星大学常勤教授 明官茂先生による教育講演会を行いました。今回は、研究発表会の内容について御紹介します。

主題「共に学び共に生きる社会の形成に向けて」 ～学びの連続性や切れ目のない支援体制の充実～

趣旨 特別支援教育を巡る最新の動向や学校等の状況を広く周知することで、インクルーシブ教育システムの推進と共生社会の形成に資する。

日時 平成30年12月7日（金） 9時45分～15時45分

場所 福島県ハイテクプラザ（郡山市待池台1丁目12番地） **主催** 福島県特別支援教育センター

【教育講演会】

演題 「学習指導要領の改訂からみるこれからの特別支援教育」
～アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業づくり～

講師 明星大学教育学部教育学科 常勤教授 明官茂氏



教育講演会では、明星大学教育学部 常勤教授 明官茂氏から「学習指導要領の改訂からみるこれからの特別支援教育～アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業づくり～」と題して御講演をいただきました。

【学習指導要領の改訂のポイント】

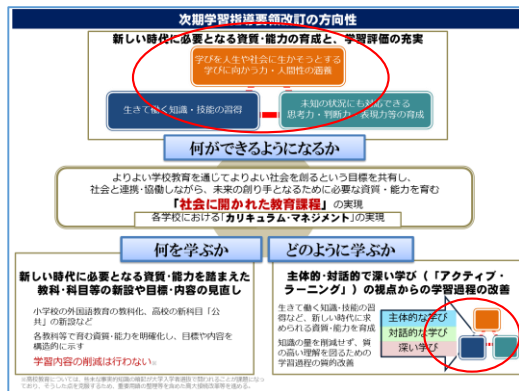
中央教育審議会の答申の内容を踏まえ、特別支援学級における教育課程の編成の基本的な考え方や、特別支援学校の各教科の充実、自立活動の改善・充実などについてポイントを絞ってお話いただきました。

【特別支援学校の授業実践から】

福島県立あぶくま支援学校と鹿児島大学附属特別支援学校の授業実践を取り上げました。その中で、子どもが自分の目標をしっかり意識して自己評価していくことの大切さや、自己評価の理由を教師が考え受け止めることが、子どもの学びの意欲につながるということについてお話がありました。また、子どもたちが主体的・対話的に学習する中で自分たちで考えていく姿や教科の見方・考え方を働かせ、深い学びにつなげている事例としてお話いただきました。

【各教科等を合わせた指導について（生活単元学習を中心に）】

愛媛大学附属特別支援学校の小学部で行った生活単元学習の授業を取り上げ、生活単元学習の指導で教科の内容をどのように関連させていくかということについて説明がありました。また、国立特別支援教育総合研究所が、広島県立庄原特別支援学校の実践を通して行った研究について紹介がありました。この中で生活単元学習の中に重要な要素や新しい資質・能力などが含まれていることなどが説明されました。このことを踏まえ、各教科等を合わせた指導において、教科との関連や教育内容は、非常に重要視されており、教育課程を検討する中でぜひ考えていってほしい点であるというお話がありました。



主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、**見通しを持って粘り強く取り組み**、自己の**学習活動を振り返って**次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているかという視点
- ② **子供同士の協働**、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」実現できているかという視点
- ③ **習得・活用・探究という学びの過程**の中で、各教科等の特質に応じた「**見方・考え方**」を働かせながら、**知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したり**することに向かう「**深い学び**」が実現できているかという視点。

教育研究 発表内容

【研究発表1 教育研究】

「知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校における各教科の指導の充実」

～新学習指導要領を踏まえた児童生徒の自立と社会参加に向けた資質・能力の向上を目指す実践研究～



知的障がいのある児童生徒が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし自立し社会参加するために必要な力を培うための教育の充実、各教科の指導の充実が求められています。当センターでは、研究協力校と協働で、新学習指導要領を踏まえた実践研究に取り組みました。

【研究協力校】

【研究推進モデル校】

あぶくま支援学校
石川支援学校

【地区協力校】

大笹生支援学校 西郷支援学校
猪苗代支援学校 富岡支援学校
いわき支援学校

資質・能力の明確化や授業改善の視点（主体的・対話的で深い学び）の共有など、新学習指導要領に基づく取組が各校で始まっています。

次年度の取組

※今後、重点的に取り組んでいく内容

【1】新学習指導要領の理解啓発

□授業実践と結び付けた理解の促進と情報発信

【2】新学習指導要領を踏まえた授業研究（研究協力校との取組）

□新学習指導要領を踏まえた学習指導案の検討・実施

□授業検討会の在り方の検討・実施（学習評価、授業改善の視点等）

□指導内容、年間指導計画、教育課程の見直し方法の整理・提案

【3】学びの連続性を確保するためのシステムの構築

□「学びの履歴」シートの活用



調査研究 発表内容

【研究発表2 調査研究】

「発達障がいの可能性のある児童生徒を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査研究」

小・中学校、義務教育学校の通常の学級及び高等学校に在籍する学習面や行動面等で特別な教育的支援を必要とする児童生徒の状況を明らかにするとともに、各学校における合理的配慮の提供状況を把握するために、標記の調査を実施しました。

調査の結果、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の状況については以下のとおりとなりました。

小・中学校の通常の学級

特別な教育的支援を必要とする児童生徒

6.0%*

学習面や行動面に著しい
困難を示す児童生徒(知的を除く)
4.7%

医師による
障がいの診断のある児童生徒
1.3%

高等学校

特別な教育的支援を必要とする生徒

2.4%

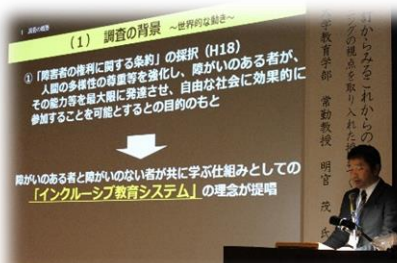
学習面や行動面に著しい
困難を示す生徒(知的を除く)
1.3%

医師による
障がいの診断のある生徒
1.1%

*割合の数値は、小数第2位を四捨五入しています。

また、特別な教育的支援を必要とする児童生徒のうち、本人又は保護者との合意形成の上、合理的配慮の提供を受けている児童生徒の割合は、全体の30.7%であることが明らかになりました。

次年度は、調査で得られた結果を基礎資料とし、合理的配慮の提供に関する実践研究を行い、特別支援教育の一層の推進を図るとともに、教職員研修の充実に取り組んでいきます。



【長期研究員発表 I (二年度)】

1 「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童がみんなと共に学ぶための授業づくり」 ～学級全体への支援と個への支援の両面から学習活動を支えるという視点で～

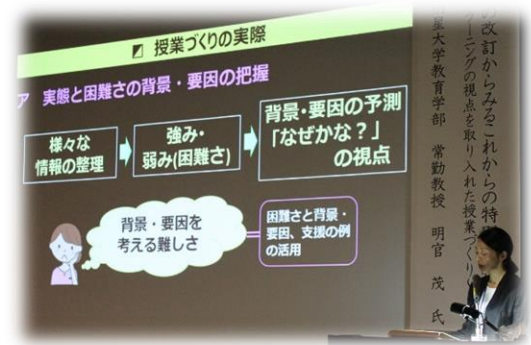
何らかの困難を抱え学習している児童生徒が、通常の学級にも複数在籍していることが考えられる今、特別な支援を必要とする児童生徒が学級のみんなと共に学ぶための授業づくりの在り方はどうあればよいかについて研究しました。研究では、文献研究や授業観察、先生方からの聞き取り・アンケート結果から、以下の4つに視点を整理しました。そして、授業実践を通しその有効性を明らかにすることができました。

【授業づくりで大切にしたい視点】

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 実態と困難さの背景・要因の把握 (学級及び個) | |
| 2 学級全体への支援の工夫 | 2-1 個への支援と全体への支援の関連付け 2-2 多様性に応じた配慮
2-3 他者との関わりを意識した学習活動 2-4 明確なねらいと具体的な評価 |
| 3 全体への支援の中で行う
個への支援の工夫 | 3-1 実態や困難さの背景・要因を踏まえた支援 |
| 4 自己肯定感や達成感の向上 | 4-1 肯定的な評価 4-2 認め合う場の設定 |

【「授業づくりで大切にしたい視点」を踏まえた 授業づくりから見えてきたこと】

- 特別な支援を必要とする児童ばかりでなく、学級全体の学習意欲の向上や分かりやすい授業につながること。
- 学習機会の保障や全体と個への支援のバランスといった課題解決の糸口ともなりえるものではないかということ。
- 教科指導や学級経営の視点と関連し合うことにより、「みんなが共に学ぶ」授業につながる。



【長期研究員発表 I (二年度)】

2 「中学校の知的障がい特別支援学級に在籍する生徒が、自己の進路を主体的に選択、決定していくことができるような進路指導の充実」～個に応じた計画的、組織的、継続的な指導を目指して～

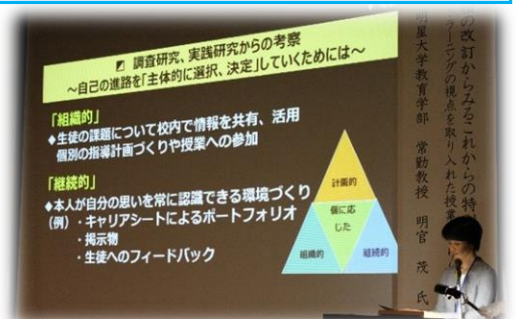
「中学校の知的障がい特別支援学級に在籍する生徒が、自己の進路を主体的に選択、決定するための進路指導のあり方を調査並びに実践によって明らかにする」ことを目的に研究を行いました。

キャリア教育アンケート、本人や周囲の人達への聞き取り、キャリアシートや作文への記入内容等から分析、検証した結果、特に身に付けさせたい力として焦点をあてた「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」に伸びが見られ、本人や周囲の人達も成長を実感していることが分かりました。

研究を通し「主体的な選択、決定」のための進路指導の充実につながる視点を、以下のように整理しました。

- ・個に応じた：キャリア教育アンケート等による生徒の実態把握、指導の評価、改善
- ・計画的：三年間を通して自分の個性や適性を理解できるよう進路指導計画への反映と指導の実践
- ・組織的：生徒の課題について校内で情報を共有、活用
他の教職員の個別の指導計画づくりや授業への参加
- ・継続的：本人が自分の思いを常に認識できる環境づくり

- 「主体的な進路の選択、決定」のための進路指導とは、生徒が学習を通してその後の具体的な行動につながるよう手助けすることであり、キーワードである4つの視点を活かして指導していくことが有効であること。
- 本人が自分の思いや願いを自覚し、その実現に向けて努力し続ける能力や態度を育てていくため、生徒の発達段階や「生き方」の指導が重要であること。



【長期研究員等発表Ⅱ（一年次）（ポスター発表）

1 「中学校の自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する生徒が、自己実現を図るための進路指導の在り方」

自閉症・情緒障がい特別支援学級の生徒が、その特性や有する困難さから自身のよさを十分に発揮できていない実態や、生徒の実態の多様さなどから進路指導に難しさを感じるという担任からの声をよく耳にすることなどを背景として、上記のテーマを設定しました。

一年次の取組として、自閉症・情緒障がい特別支援学級へのアンケート調査や高等学校への聞き取り調査を行った結果、自閉症・情緒障がい特別支援学級の進路指導の課題と改善の視点を以下のように整理しました。

- 「コミュニケーション」、「自己理解」が生徒の課題であり、進路指導の要である特別活動の「自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力」を発揮できているとはいえないのではないか。自立活動を積極的に取り入れていくことが、課題や困難の改善・克服と「自己実現のために必要な資質・能力」の育成に向けた指導を支えることにつながるのではないか。
- 進路指導が交流学习中心で学習を十分に深めることができていない点については、進路指導を「個に応じた」視点をもって見直すことがその改善につながるのではないか。

二年次は、自己実現を図るための進路指導のあり方を明らかにするため、以下の内容に取り組みます。



- 「個に応じた」進路指導計画の見直しや個々の生徒の実態把握を踏まえた「自立活動のための個別の指導計画の作成」と実践
- 「自立活動の取組を生かす場面の設定」



【長期研究員等発表Ⅱ（一年次）】（ポスター発表）

2 「教師がつながりながら学び合う、校内の特別支援教育の充実」 ～児童の困難さに気づき、必要な支援を考え合うチームとしての学校を目指して～

障がいのあるまたは可能性のある児童生徒の割合が増加している現状に対し、「チームとしての学校」の取組の重要性が指摘しています。このことに対し、それぞれが持っている知識を出し合い考え合うことで個々の資質向上を図り、複雑化・多様化する学校の課題にみんなで向き合うチームとしての学校を目指すことができないうかと考え、上記のテーマを設定しました。

一年次は、実態調査（校内の特別支援教育に関するアンケート）を行い、特別な配慮を必要とする児童についての話し合いの実態を踏まえて、継続可能な話し合いのための要素をまとめました。更に「話し合いのサイクル」と名付けた手順と合わせて、学年を中心とした話し合いの実践を行いました。

継続可能な話し合いのための要素

- 学年を中心とした集団 + α（関係教師）
- 放課後の時間に位置づけ（学年会等を使って30分以内）
- 「困難さの背景」の視点を加える
- 場の雰囲気



話し合いのサイクル

- ①児童の抽出と困難さの把握
- ②困難さの背景・要因の考察・共有
課題の選定・優先順位の検討
- ③課題解決のための支援の検討
- ④学習活動・日常生活における実践
- ⑤児童の変容の共有、支援の評価・修正



今後、話し合いを進める時に以下の視点を大切にしたいと考えます

【話し合いのサイクルの視点から】

- ①困難さの的確な把握
- ②背景・要因の視点
- ③支援の明確化
- ④支援と観察を継続する工夫
- ⑤話し合いの軸の明確化

【つながり合いの視点から】

- 自分の思いや考えが出せる雰囲気づくり
- 取り組む人の思いをくみ取った話し合いと支援の決定
- 児童のよい変容を見つける視点